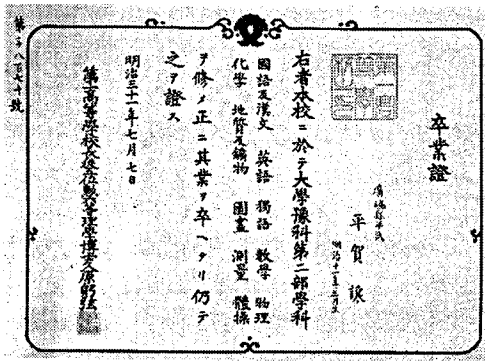


東京大学史史料室ニュース

第3号 1989・4・10

目次

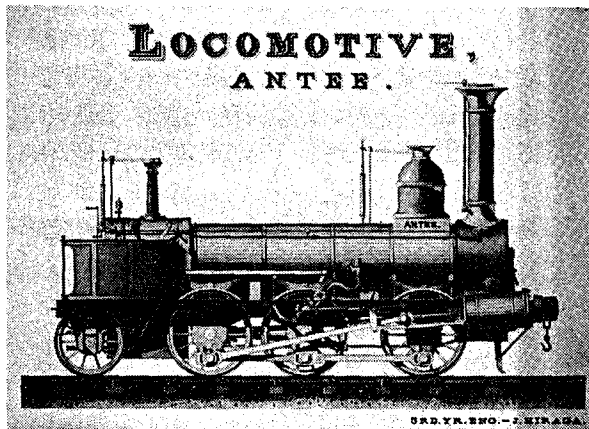
歴史についての考え方 2
 渡辺洪基関係文書の移管 3
 ハーバード大学文書館(2) 4
 『東京大学史紀要』7号刊行 5
 受贈図書一覧(昭和63年1月~10月) ... 6
 学科・教室等沿革史作成の協力について 7
 東京大学史料の保存に関する委員会名簿 7
 史料室日誌抄録(昭和63年10月~2月15日) ... 8



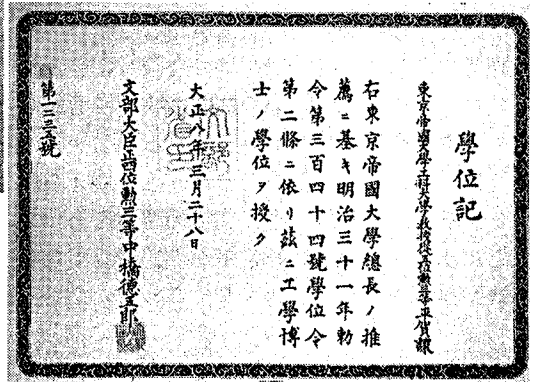
左上：第一高等学校大学予科第二部の卒業証書。平賀は、同年7月8日、東京帝国大学工科大学に入学する。

左下：英国グリニッジ海軍大学校 (The Royal Naval College) 造船学科留学中 (明治38年9月~41年6月) の習作画。名前の「ニシャルが」となっているのは、後年「ゆずる」と読まれた譲を当時「じょう」と読んでいたため。当時の他の文献にも見られる。

(左上38.2cm×49.3cm、左下44.2cm×61.1cm)



右：昭和13年12月から18年2月まで東京帝国大学総長であった平賀譲の工学博士学位記。(表の全体が山吹色に彩色、39.0cm×52.6cm)



ある研究会の席上で、こんなことが話題になった。理工系の大学で、科学や技術についての歴史的視点は、どのくらい自覚されているのだろうか。ある先生は、多くの工科系の大学に技術史や科学史の講義が置かれるようになり、それだけでも従来とは随分変わってきた、と仰言る。建築史はもともと分野として確立しているし、電気、土木、機械工学などの分野でも、最近では、歴史的な視点の重要性についての自覚は日増に増大している、という御意見である。一方、それは全然当たらない、と仰言る先生も少なくない。工業高校の指導要領の改正に当たって、技術史を取り入れようと提言したが、まだ十年早い、とあっさり否定されてしまった、理工学部の研究者は歴史研究などしていても「業績」にならない、とまるで見向きもしない、歴史などに目を向けると、それだけで、現場の研究から落伍した、もう研究を諦めた、と受け取られる、老人の手すさびとしか見られていない、などなどの議論が出て、期せずしてちょっとした論争に発展した。

理工系の研究者が、歴史に手を出す、それも手すさびではなく本気で取り組もうとするとき、強烈なプレッシャーがかかることは本当である。日本の科学史研究を代表する学者であった故広重徹は、理論物理学を捨てて科学史に転向したが、その広重は、科学史研究が相手として不足のないものであり、十分な能力を持った一人前の研究者が取り組むべき課題であることを、身を以て立証しようとし続けた。それは、自分の周囲の物理学者からの、歴史研究に対して与えられるマイナスの評価への、無言の抵抗だった、とも考えられる。それでも科学史は、広重の努力もあって、とにかく今、現場の科学者から、表立った軽蔑や無視を被ることは少なくなった。しかし、技術史の方は、当の技術分野に実際に携わった人間以外には立入不可能という考え方がまだ強く、それだけに、引退した技術者の余技

という印象を完全には拭い去ることができないでいる。建築史だけは、比較的古くから、学問分野として成立していたけれども。

そのような事情が少なくとも部分的には影響して、科学技術の歴史的な資料の保存・管理という点では、日本の状況は決して誉められたものではない。日本文化の特質の一つに、新しいものを積極的に取り入れるけれども、それによって古くからの伝統を完全に捨て去ってしまうようなことはしない、という点が数えられたはずである。例えば、漢字が導入されたときにも、訓読みをそれに与えることによって、「やまとことば」という伝統を保存することに成功したではないか。もっとも、そのような制度的な対応はしても、歴史的なものを、それとしてきちんと保存するという点に関して、日本社会が全体として本気で取り組んできたのだろうか、という疑問は、たしかに残るのである。例えば、今、木造建築は結構盛んなようだが、伝統的な工法と大工の技術がどこまで保存されているか、という点になると、お寒い限りであることは、よく指摘される事実である。

それにしても、産業界をはじめとして、社会の各所に残されている、技術についての歴史的な資料をどのように保存、整理、管理するか、ということ、今真面目に取り上げなければ、とくに「進歩」の追及にのみエネルギーを費やしている現状からすれば、取り返しのつかないことになるのは目に見えている。過去の歴史は、現在にとって決して「過去」ではないことを自覚すれば、東京大学内の科学技術の資料館の設立も含めて、この分野での一般の理解が切に望まれる。

(先端科学技術研究センター 教授)

渡辺洪基関係文書の移管

益田 宗

都内を走り廻っている清掃自動車のマーク、といったら叱られるかも知れないが、東京都の徽章の案出者である東京大学初代総長渡辺洪基（1847—1901）関係文書類は、遺族の日本画家渡辺貞子氏からの寄贈を受け、東京大学史料編纂所に所蔵されていたが、東京大学史史料室の発足に伴い、歴代総長の関係文書といっしょに保管し閲覧に供するのが最善と判断、今度、史料室に移管されることになった。

洪基は、弘化4年12月23日、現在の福井県武生市の生れ、父は蘭方医であった。西暦に換算すると、1848年1月28日となるが、歴史の教科書風に機械的に換算すると、弘化4年は1847年ということになる。家業を継ぐため、福井の城下に赴いて勉学に励んだが、この時の師のひとり益田宗三は筆者の曾祖父である。洪基は、明治維新の折に彰義隊に加わり、敗れて浅草の寺の床下に潜伏したという。彼は、これよりさき福沢諭吉の慶応義塾の門を叩いたことがあったから、師の諭吉が上野の山の砲声をよそに聞きながら英学を教授し、弟子の彼は砲煙弾雨の中を逃げ廻っていたことになる。やがて明治新政府に出仕し、岩倉遣欧使節団に随行したが、途中、意見不一致を理由に帰国の途に就いた。のちに外交官としても活躍するようになるが、単身赴任を嫌って夫人を同伴したという。外交官の夫人同伴赴任の第一号である。

洪基が帝国大学に関係したのは、東京府知事から総長に転じた彼38歳の明治19年3月からで、折しも法理文三学部、医学部に工部大学校をも合わせた帝国大学の創立した時期にあたる。伊藤博文・森有礼等の達ての推奨により引き請けたという。4年後の23年5月、特命全権公使となってヨーロッパに赴任するに伴い、大学を去った。彼は、以前、学習院にも関係し、また東京地学協会・国家学

会・史学会等々の多くの学会・団体の創立にも参加している。のち、衆議院議員、貴族院勅選議員となり、晩年、伊藤博文の政友会の創立委員、同総務委員も勤めた。この経歴が示すように、彼の一生は、岩倉遣欧使節団以来、伊藤博文と関係してくる。

今度、移管された文書類は、彼の経歴を反映して、政治・外交・教育など各分野にわたる約700点であり、その全貌は、東京大学百年史編集室が作った『東京大学史史料目録1 渡辺洪基史料目録』（昭和52年）で知ることができる。いずれ史料室の閲覧設備が整いつつあるが、ここで公開されることになるが、それまでは、史料編纂所の図書室の協力をえて、そちらで閲覧することができるようになるであろう。（史料編纂所でも、写真帳による閲覧は、史料室閲覧開始後も続けられるという。）

なお、洪基の甥（末弟の四男）渡辺進氏は、未だ百年記念事業委員会が発足して間もないころ、史料編纂所に伯父の関係資料を閲覧に来られ、百年史編集の企画が進みつつあることを知って、その一助にと寄付金を残していた。未だ募金活動の始っていないころのことである。けだし、百年記念募金第一号ということになる。

(史料編纂所 教授)

世界の大学文書館(2)

ハーバード大学文書館(2)

前回、ハーバード大学文書館の沿革を中心に紹介したが、今回は文書廃棄の規定と特殊コレクションについて紹介する。

同大学では、保存されていたはずの第1次世界大戦中の会計記録が消えていったという苦い経験があって、1939年2月の大学文書館設立に際して、職務上のファイル・記録・文書の廃棄には、所定の手続を踏むことを決定した。

まず、教職員や事務局の職務上の文書は同大学の所有財産 (property) であると規定している。そして、この財産を廃棄するためには、評議会の事務局 (Secretary)、大学図書館長 (Director)、及び累積文書の当該部局を管理する教職員で構成する3者委員会の承認を得、廃棄に必要な正式の合意文書に署名を得なければならないとするのである。

各部局の事務局は、印刷物や写しについて、文書ファイルから各1部を残しておけば除去していく事ができる。しかし、それ以上はすべて上の規定によらねば廃棄することができない。各部局は、文書を廃棄しようとする時は、文書館長と連絡をとり、ファイルの評価して貰い、もし廃棄が適当であればその手続を始めてもらう。一旦そのように決れば、同じファイルの同型の文書は、さらに許可をえる必要なしに廃棄することができる。

また、各部局の部局長・事務長は、その文書をいつまで直接の管理下に置くのが適当か判断し、不要となった文書は大学図書館内の大学文書館に送らなければならない。

なお、ここでいう文書とは、①発信書簡控及び受信書簡類、②記録帳・備忘録 (records and memorandum books)、台帳 (ledgers)、日誌類 (journals)、現金出納簿 (cash-books)、証明書等 (vouchers)、謄写版印刷物や同様の印刷物 (mimeographed and similar material)、及び③職務用印刷物 (どのようなものであっても) を収めたファイル、を指している。

このような規定を設けることによって、保存文書が増えるのではないかと思われるのだが、ハーバード大学の場合は逆で、大量の旧蔵不要文書が廃棄された。

東京大学では、前号に紹介があるように、本部事務局の文書管理規則改正により、昨年7月から、永年保存文書は20年後から、保存年限の切れた文書は該年限後から東京大学史料室に移管できることとなった。しかし、保存年限が過ぎた場合の保管廃棄の取捨選択については未だ手続が定められていない。

次に、特殊コレクションについて紹介しよう。これは公文書と公的記録とを除いた所蔵資料の事であり、所蔵資料のおよそ1/4を占めている。

1) 卒業論文、学位論文、受賞論文 (Theses and Prize Papers)

博士論文は1873年以後の物は全て文書館に保管され、現在は毎年約400点ずつ増加。それ以前の物も多少はあり、1785年の医学博士の論文なども見られる。学部卒業論文は1925年以来優秀なもののみ (広さの関係で一部は部局図書館にもあるが)。学内賞の入選論文なども多い。これらは、年1万4000点に上る閲覧請求の半分を占める。

2) 伝記ファイル (Biographical Files)

卒業生、在學生、教職員について、新聞記事、卒業後の動静のカード、及び個人の雑多な経歴情報。5年単位でファイルされている。1979年当時で8万人以上の情報が収められている。これは毎年追加されていく。

3) 教職員の個人的文書 (Personal Papers of Officers)

教授や管理職事務員の私文書。300組以上のコレクションがある。中には作成者本人や遺族から了解を得なければ研究用に公開されないものもある。

4) 沿革一般に関わる資料 (General History)

学術的な歴史研究、新聞の切抜き、同大学に影響を与えた立法と政治状況の論稿、同大学の過去の有名な事件・催し等に関する情報。

5) 学生の勉学の経験 (Academic Life)

入学許可の方針・手続・要件の記録。教育課程の変遷を物語るものとして、大学一覧、必読

書推薦書リスト、講義記録、試験問題、学生の受講ノート（1663年のものもある）・日記。卒業式、学位授与式の記録、プログラム、式次第、また卒業祝賀会における式辞・スピーチ。

6) 同期会とクラブの文書 (Class and Club Archives)

1979年当時で175の同期会と1000にのぼる学生・教員・卒業生の組織・団体の資料。学生出版物と同窓生の出版物。それらを補完するものとして、スポーツ、礼拝式、大学歌曲、学生生活、出費の記録。同大学の学生・教職員・卒業生等が登場し、また同大学が舞台となる小説・芝居・詩歌・風刺物。

7) 建造物と物品 (Buildings and Property)

建造物についての歴史的・建築学的資料。受贈物、遺品、物品。構内の中心にある彫像、記念教会の鐘などの情報。

8) 学科・学部・大学院・研究所等 (Departments, Schools and Research Institutions)

それぞれで印刷公刊される記録（書籍、冊子、紀要、掲示・通知）。学則と慣例、奨学金、教授の身分規定、寄付された基金の記録。

9) 視覚的コレクション (Visual Collections)

写真、絵画、印刷物、マイクロフィルム、

マイクロフィッシュ、コンピュータ記録、録音テープ、レコード盤、映画フィルム、ビデオテープ。写真の複写はほとんど図書館を通せば可能である。

東京大学史史料室の現在の組織も、特殊コレクションに対応するものとして、1) 以外の物を保管・所蔵の対象としているが、断片以上の所蔵コレクションとなっているのは、『東京大学百年史』編纂過程で積極的に収集した3)、4)のみである。ハーバード大学図書館のような組織に東京大学史史料室を発展させて行くには、どの位の規模の建物と教職員が必要であろうか。 (室員 所澤 潤)

参考文献

The Harvard University Archives.

Harvard University Library, 1979.

Shipton, C.K. *The Collections of the Harvard University Archives.*

Harvard Library Bulletin, 1947, 1, 176-184.

Shipton, C.K. *The Harvard University Archives in 1938 and in 1969.*

Harvard Library Bulletin, 1970, 18, 205-211.

『東京大学史紀要』7号刊行

東京大学史史料室では、『東京大学史紀要』の第7号を刊行し、5月中頃配布する予定である。

同紀要創刊は昭和53年で、従来は東京大学百年史編集室の手で編集発行されて来た。百年史編纂事業の終了にともない、今号から、東京大学史史料室が発行を引継ぎ、東京大学史料の保存に関する委員会が編集を引継ぐことになったものである。

同紀要は、創刊当初から百年史編纂終了後も刊行を継続することが考えられており、あえて百年史という語を入れない誌名が採用されたいきさつがある。このたび刊行が継続することにより、創刊時の構想が実現したわけである。

今後、毎年度刊行を継続し、東京大学の学術史・教育史・体制史に関する基礎的研究の

成果を公表していくことになる。

今号の主要な内容は次の通りである。

論説 鹿子木敏範 (熊本大学名誉教授・尚絅大学教授)：明治初年のドイツ医学導入について—ドイツ側新史料による東京大学史補遺—

研究ノート 所澤 潤 (室員)：東京帝国大学入学選抜における、翌年度入学の「先入権」の制度—明治三十年の導入から大正六年の廃止まで—

資料 寺崎昌男 (教育学部教授)：『東京大学 教育制度研究委員会記録』(一九四六年・海後宗臣蔵)

照沼康孝 (文部省)・中野 実 (室員)：長与又郎日記 昭和十三年七月

中野 実：新渡戸稲造『大学制度改正私見』(二)

中野 実・佐々木尚毅 (立教大学大学院)：初代総長渡辺洪基提出「一年志願兵規則改正ニ関スル建言」について

受贈図書一覧（昭和63年1月～10月）

- 大阪市立大学百年史 全学編上・下
同百年史編集委員会 昭和62年11月
明治の思想と文化一大久保利謙歴史著作集6
昭和63年2月
成瀬記念館 1987 No.3
日本女子大学成瀬記念館 昭和62年11月
君島一郎関係文書（目録）
一近代立方過程研究会収集文書 No.63
東京大学法学部近代日本法政史料センター
原資料部 昭和61年3月
東京教育大学評議会・文学部教授会資料
同前 No.64 昭和62年3月
松室致・鶴丈一郎関係文書目録
同前 No.65 昭和62年11月
中山寛六郎関係文書目録
同前 No.67 昭和62年11月
明治の化学者—その抗争と苦渋—
広田鋼蔵 昭和63年2月
週刊現代
講談社 昭和63年3月12日号
人民読本（竹越与三郎著）〔慶応義塾福沢研究
センター近代日本研究史料(2)〕
昭和63年1月
早稲田大学史紀要 第20巻
同大学史編集所 昭和63年2月
Higher Education and the Student Problem
in Japan
Kokusai Bunka Shinkokai 昭和57年
刑政 第99巻第3号 通巻1749号
—矯正協会創立百周年記念特集—
矯正協会編 昭和63年3月
同志社談叢 第8号
同志社社史資料室編 昭和63年2月
日本大学精神文化研究所紀要 第19集
同研究所 昭和63年3月
博物館だより No.2 昭和63年3月
—宮市博物館
菊池正士 業績と追憶
菊池記念事業会編集委員会 昭和53年11月
法政大学史資料集 第11集
同大学史資料委員会 昭和63年3月
東洋大学史紀要 第6号
同学創立100年史編纂室 昭和63年3月
野間教育研究所所蔵学校沿革史誌目録〔1987
年度増加図書〕同研究所 昭和63年3月
東京大学第二工学部
今岡和彦 昭和62年3月
西川正治先生 人と業績
同先生記念会編纂 昭和57年7月
近代日本研究 第4号
慶応義塾福沢研究センター 昭和63年3月
愛知県義務教育理科教育史
朝倉富男 昭和63年3月
美人画にみる繊維の手仕事—蚕錦絵—
—宮市博物館 昭和63年4月
埼玉県行政文書総目録第3集
埼玉県立文書館 昭和63年3月
埼玉県行政文書総目録第3集（別編）
同前 昭和63年3月
東金市台方前嶋家文書目録1
千葉県総務部文書課 昭和63年3月
北の丸—国立公文書館報—第20号
同館 昭和63年3月
国立公文書館年報 第17号（昭和62年度）
同館 昭和63年5月
教育週報 1号から440号（原本）
昭和11年～20年
7月
太田正雄先生（木下杢太郎）生誕百周年記念
会文集
同百周年記念会 昭和61年3月
土肥慶蔵先生生誕百年記念会誌
同百年記念会 昭和42年11月
会報 18号、19号、23号、24号
東京大学ホッケー部・学士ホッケークラブ
昭和57年7月、58、59、63年
千葉県文書館—開館記念誌
同館 昭和63年6月
千葉県成立へのあゆみ
—文書に見る房総人のくらし—
同前 昭和63年6月
国の旗と紋章
（シリーズ 人間とシンボル1号）
中川ケミカル 昭和62年4月

都市の旗と紋章
 (シリーズ 人間とシンボル2号)
 同前 昭和62年10月
 学校の旗と紋章
 (シリーズ 人間とシンボル3号)
 同前 昭和63年3月
 富士論叢
 富士短期大学学術研究会 昭和63年5月
 博物館だより No.3
 一宮市博物館 昭和63年7月
 8月
 週刊朝日第93巻第34号
 朝日新聞社 昭和63年8月12日
 横浜開港資料館紀要6号
 横浜開港資料館 昭和63年3月
 明治大学百年史 第一、二巻(史料編I、II)
 同編纂委員会 昭和61年3月、63年3月
 9月
 中央大学百年史編集ニュース第10号
 同編集委員会専門委員会 昭和63年9月

Japan Update No.9
 財団法人経済広報センター 昭和63年9月
 みどり 第3巻第4号
 株式会社ミドリ十字 昭和63年10月
 稲山嘉寛回想録
 新日本製鐵株式会社「稲山嘉寛回想録」
 編集委員会 昭和63年9月
 10月
 追悼集II
 一同志社人物誌明治四十一年～大正四年
 同志社社史資料室 昭和63年10月
 東洋大学百年史資料編I・上
 同編纂委員会 昭和63年7月
 東京女学館百年小史
 同百年史編集室 昭和63年11月
 中日交流標準日本語(第1話～第49話)
 制作:中国中央電視台・人民教育出版社外
 国際教育情報センター—その目的と活動—
 同センター教科書・教育資料調査研究所
 昭和63年6月

学科・教室等沿革史作成の協力について

本学では、以前から『東京帝国大学五十年史』(昭和7年刊)、『東京大学百年史』(昭和59～62年刊)とは別個に、各部局でかなり多くの公的な沿革史が編纂されてきました。古いところでは昭和7年の『東京帝国大学農学部附属朝鮮全羅南道演習林史』(260頁)などを見ることが出来ます。近年は、部局単位のもの『東京大学百年史』部局史で一通り編纂されたこともあり、学科単位、研究室・教室単位、附属施設単位の沿革史編纂がさかんとなっています。現在も、本史料室の知る限りで4件が進行していますが、ほかにもいくつか進行中のものがあると思われま

す。本史料室では、沿革史の編纂に史料を提供することを業務の1つとしております。部局の沿革史料はそれほど所蔵しているわけではありませんが、思わぬ史料が見つかることもあります。

お気軽に、本史料室にご相談下さい。

現在は、工学部附属総合試験所50年史、医学部皮膚科100年史の編纂の協力が進行しております。

東京大学史料の保存に関する委員会名簿

委員長	原	朗	(経 済)
委員	高 橋	進	(法)
〃	養 老	孟 司	(医)
〃	川 上	秀 光	(工)
〃	伊 藤	隆	(文)
〃	阪 口	豊	(理)
〃	田 中	学	(農)
〃	鳥 海	靖	(教 養)
〃	寺 崎	昌 男	(教 育)
〃	古 賀	憲 司	(薬)
〃	武 田	展 雄	(先端研)
〃	平 石	直 昭	(社 研)
〃	黒 田	晴 雄	(図書館)
〃	瀧 澤	博 三	(事務局)
〃	益 田	宗	(史料)
幹 事	横 澤	義 雄	(事務局)
〃	森 谷	俊 直	(事務局)

平成元年4月現在

史料室日誌抄録（昭和63年10月～平成元年2月）

10. 7 金 田口親氏より、元帝国大学総長外山正一より田口卯吉宛葉書22通を借用。
- 10.20 木 本室員が実行委員となっている総合研究資料館「本郷キャンパスの百年展」披露。21日より公開。
- 10.24 月 大隈重信展参観。
11. 1 火 『東京大学規則集』加除整理（内容は7月19日現在）。
11. 4 金 元文科大学長坪井九馬三御遺族と資料を寄託から寄贈へ変更の件に付き、御遺族と協議。
11. 7 月 庶務部国際交流課と協議し、外国大学便覧、国内大学外国語便覧を本室へ移管するシステムを決める。
- 11.12 土、13 日 都立中央図書館所蔵元文科大学長井上哲次郎関係文書調査。
- 11.17 木 東大演習林写真集写真目録作成終了。
- 11.21 月 第13回東京大学史料の保存に関する委員会開催。
- 11.26 土 元文学部教授の栗田寛関係史料受入れについて、御遺族と協議。
12. 1 木 『東京大学史史料室ニュース』第2号頒布開始（11.15付発行）。
12. 3 土 栗田寛関係史料寄託。
12. 6 火 寺崎前室長と原新室長、本室に於て引継ぎをなす（室長辞令は10.14付）。
12. 7 水 医科学研究所倉庫見学。
12. 7 水 新旧室長、総長と会見。
- 12.15 木 東京都公文書館書庫を見学。また、東京都でのカードに依る文書管理と同館との関係について説明を受ける。
- 12.19 月 本室保管史料を使用した『中央大
学史資料集3』が送付される。
- 12.20 火 『東京大学史紀要』7号編集会議。
- 12.21 水 法学部より移管の書棚を本室に搬入し、その一部を備え付け、閲覧室等に多少の配置換えを行う。
- 12.23 金 旧外事掛関係史料受入れ。
- 12.26 月 渡辺洪基文書の移管依頼を史料編纂所長宛に発送。

昭和64年／平成元年

1. 5 木 ボローニャ大学へ寄贈のため、総合図書館に『東京大学百年史』全10巻及び正誤表を届ける。
1. 6 金 大型計算機センターより所管替えの書棚等を搬入。
- 1.10 火 『東京大学史紀要』7号編集会議。
- 1.21 土 栗田寛関係史料整理開始。
- 1.23 月 第14回東京大学史料の保存に関する委員会開催。本室の現行の英語名を承認し、東京大学史料の保存に関する委員会の英語名を決定。史料編纂所長より、渡辺洪基文書保管場所変更の件承諾の文書受領（1.17付）。
- 1.25 水 「記録資料の保存に関する日英セミナー」（於国文学資料館）参加。
- 1.27 金 史料編纂所を訪ね、渡辺洪基文書を確認。
2. 4 土 東京都文京区立誠之小学校より誠之史料館担当の2教諭来室見学。同館の運営につき助言をなす。
2. 7 火 第3回東京大学史料の保存に関する委員会ワーキンググループ開催。
2. 8 水 本室の鍵交換工事。
2. 9 木 大型計算機センターから書架を搬入。

題字 森 亘前総長

東京大学史史料室ニュース 第3号

発行日：1989年4月10日（年2回刊）

編集・発行：東京大学史史料室

東京都文京区本郷7-3-1

電話（812）2111内線2036

印刷所：よしみ工産株式会社

北九州市戸畑区天神1-13-5

Archives Section of the University of Tokyo